

尾花沢市議会議長 殿

会派名（無会派議員）名 塩原未知子



調査研究報告書

次のとおり政務活動事業を実施しましたので報告します。

事業名	水辺のアクティビティと公園維持調査
期日	令和3年9月28日（火）
主な利用交通機関	自家用車
実施場所	(1) 長井市 長井ダム（百秋湖） 川のみなと長井（アルカディア観光局） (2) 長井市 白つつじ公園 南陽市 烏帽子山公園
調査研究内容	(1) ダムの多目的活用と「水辺のアクティビティ」のあり方調査 (2) 長井市 つつじ公園（6.3haの園内に約3,000株の白つつじ） 南陽市 烏帽子山公園 桜の樹木管理の現状調査 シーズンオフ時のつつじの管理や公園の現状把握 徳良湖花畑の管理に関する調査
参加者	塩原 未知子

※添付書類：所感等を任意様式にまとめ添付する

(所感)

【徳良湖・水辺の安全安心な維持管理を議論実施できる組織の立ち上げが急務】

築堤100年の農業用ため池「徳良湖」は山形県立公園御所山の飛び地として50年前に認定され、山形県、尾花沢市、土地改良区の3者で分担、管理している。市では更に湖畔周辺の維持管理のほとんどを(株)尾花沢市ふるさと振興公社に業務委託をしている。

今回の調査で注目したのは「長井ダム水源地ビジョン推進会議」(<http://kiyokimizu.jp/>)と



長井ダムと百秋湖の水の利用とそれを取り巻く関係団体のあり方だ。長井市と様々な民間団体の組織が連携し、水辺を利用したまちづくりのビジョン策定と運営を工夫していた。

観光面では近隣地域と連携、観光関係者(長井、南陽、白鷹、飯豊、小国)で組織している「DMO やまがたアルカディア観光局」(<https://arcadia-kanko.jp/>)が「川のみなと長井」(<http://kawanominato.jp/>)に拠点を置き展



開している。自治体の壁を逆手にとって設立したDMOが民間の力を最大限に活用して様々なサービスと情報発信を積極的に展開している。長井ダムの観光での活用は水陸両用のバス運行やダムのライトアップ等多岐に



わたる。ダム周辺の水辺の維持管理は将来にわたって続く。観光地としての魅力に磨きをかけ、アルカディア企業局の活躍で収益性のある事業を官民あげて企画し、持続可能な魅力的な水辺を活かしたダムの維持につながっていると感じた。築堤100周年を迎えた徳良湖の持続可能な水管理と、更なる市民憩いの場の活性化の手本としていきたい。

徳良湖も「長井ダム」や「川のみなと」の運営を習って、老朽化した施設の有効活用で新たな水辺のアクティビティの事業化を積極的に行い、清らかな水の管理の維持も合わせて考えなければならない。築堤100年の今年は、将来にわたって持続可能な湖畔の魅力をアップさせる好機としたい。湖畔の花畑構想も良いが、農薬や堆肥で水辺がどう変化していくのか危惧される。夏場のアクティビティに関しては、清らかな水が欠かせず、人命救助という点からも、動力付きの救護艇の運行も始まったため注意が必要。湖畔のアクティビティが活性化してきた昨今。夏と冬の湖畔全体の環境保全と安全対策は新たな段階に入ってきた事は間違いない。

近年、北村山高校生の部活動で湖面を使うという活動も、新たに発生してくるようだ。徳良湖は3年に1度の水を抜いての湖底点検維持もあるが、これから行われている耐震性を確保するための大規模な工事(総工費約8億)も5年の歳月をかけ行われる。この事から、湖

畔の安全安心な利用と、全体の維持管理と運営に関して協議検討する組織化が急務だ。少子高齢化で人口減少が加速しているため、湖畔の利用者は市外からも多くなってきた。コロナ禍にあっても銀山温泉に宿泊者の次の目的は「最上川舟下り」が人気 No.1。夏も冬も評価も高く、四季を通して人気の観光ルートとなっている。銀山温泉から芭蕉十泊のまち尾花沢本町をルート化するためにも「銀山～徳良湖～本町商店街(芭蕉、清風歴史資料館)」のルート化の要「徳良湖」は特に力を入れたい。中でも清らかな「水」を後世に伝え守っていく今後の活動が大事。そのためにも駐車場やトイレの位置は影響が大きい。そして老朽化した施設、樹木、遊歩道、人流が対流する場所の維持管理が今後の大きなポイントとなるだろう。市民憩いの場、湖畔をフル活用して通年で安定した観光サービスを開始する事も必要だと感じた。

ため池100選選定地、花笠踊り発症の地徳良湖は、当市にとっては歴史と文化の創造の地でもある。願はくば農業遺産と言える場所となってほしいと思っている。市民憩いの場、湖畔をフル活用して通年で安定した観光サービスを開始する事も必要だと感じた。

#### 【公園の維持管理は秋から冬の手入れが肝心】

徳良湖に新たに「花畑」を造成すると聞き市の花つつじ公園と名高い場所の冬の管理を知りたかった。長井市を代表する美しい公園といえば「白つつじ公園」「あやめ園」「萩園」が思い浮かぶ。もちろん「置賜さくら廻廊」も、毎年楽しみに見に行っているが、今回は冬に向けての公園のツツジと桜の手入れを調査した。<https://kankou-nagai.jp/log/?l=309361> 長井市の白つつじ公園(松ヶ池公園)を訪れた時、芝刈り機を丁寧に走らせている人、木々の手入れをしている庭師の職人が各1名作業を続けていた。傍で子供達が遊び、ベビーカーの親子がくつろぎ、散歩する人、駐車場で一服する営業マン、様々な利用者の癒しの空間もあった。樹齢750年「七兵衛つつじ」の巨木を中心に6.3haの園内に約3000本の白つつじ。近隣には図書館や市内中心部にあるため様々な祭りやイベントの主会場にもなっている。



南陽市の烏帽子山公園では、日本一大きい石の鳥居など旧史跡などもあるが、樹齢が1000年を越えるエドヒガン桜の名木があり、桜の木一本一本に様々な団体や個人の関わりが分かるように表記され、100年以上の老木にいたってもきれいな桜の開花を願い桜の保存育成を行ってきたという。特に管理組織として「烏帽子山千本桜保存会」(<http://enterpriz.jp/eboshiyama/>) 平成2年4月25



日に設立し、毎年桜の開花や散策マップ ([http://www.bunshindou-p.com/eboshiyama/map3\\_forthickbox.html](http://www.bunshindou-p.com/eboshiyama/map3_forthickbox.html)) を作成し観光情報発信も行い活躍している。



桜の他にも、公園内全体が見事に管理されていた。地域のボランティア団体の様々な支援と情報



発信から伺える。生き生きとした老桜の見事なまでの姿から「故郷を大切に思う心」を公園の隅々まで感じた。未来に残したい風景を一望できる南陽市の桜の名勝地。春にまた満開の桜に会いに必ず来たいと思う晩秋の風景があった。

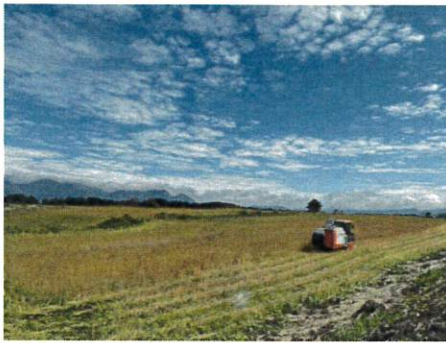


【お花畑はどんな花を咲かせるのか？】

尾花沢市でも小野市長の時代から「花でもてなす尾花沢」が、各地区の美化活動と共に定着

してきている。昭和の時代は美しい「徳良湖の桜」は名勝地の筆頭であった。

令和の今、枝折れや倒木で老木の痛々しい姿が毎年春の悲話になり、ガイドブックに掲載されるほどの花の名勝地と讃える場所は市内にみあたらない。



かつて各団体の「記念樹」の若木が育ってはいるが、度重なる湖畔の工事等で、いつの間にか消えてしまった樹木も多い。特に平成の時代、数年続いていた「新婚さんの結婚記念植樹」で植えた花水木に関しては、建物建設のため2度の移転を繰り返し、今では除雪の雪に耐える姿が痛々しいかぎりである。冬の事を考え、秋の手入をしっかりとしていく樹木管理が急務だ。湖畔のラベンダー畑も、重ねての苦

言を無視した雪まつり会場整備のため壊滅。せっかく植え直して定着したばかりだったらしいが、新たな花畑造成のために今回急遽撤去された。

現在湖畔の維持管理は（株）尾花沢市ふるさと振興公社スタッフが2名体制で行っているが、複雑で広大な敷地の管理体制は予算も十分でないようだ。また、「徳良湖マスタープラン」はあっても、総合政策課・観光課・農林課、、、各所管課が企画するイベントや新たな事業計画に関しての一定の取り決めやルールが存在しないため、中長期の管理体制に関しての全貌が見えない。二つの公園管理のオフシーズンの活用方法からもっと秋から冬にかけての管理を充実したものにしていく必要を強く感じた。

徳良湖の花畑に関しては、昨年度予算で測量設計され、来年度の4月末日までに造成される予定だそうだが、まだどんな花畑になるのか、植栽する花も管理者も決まっていないという。農薬や肥料を大量に使用するような花であれば湖畔の水質悪化が心配される。花畑を誰が永年わたってどのように咲かせていくのか。そして冬にはスノーランドの会場として毎日、重い重機が行き来するだろう。すでに造成中である花畑予定地、まだまだ様々な角度から検討すべきである。

尾花沢市の徳良湖畔の樹木にも一つ一つ人々の思いが必ずある。100年先の思いが伝わる風景をつくるために何をすべきなのか、二つの公園の維持管理を調査して深く考えた。白つつじ公園も烏帽子山の桜も冬ごもり前、これから来る厳しい冬を迎える準備の最中であつた。春の定植の際、豪雪の尾花沢を十分に配慮した見直しが必要で、冬のイベントの活用時も十分注意して企画していく必要があると確信。

特に豪雪地では、冬から春にかけてこそ慎重に手入れが必要。湖畔の水環境保全に重点を置き、丁寧な設計をすべきであり、そもそも花畑を雪置き場、除雪重機の下敷きにするなどは、決してあってはならない。

令和3年12月20日

尾花沢市議会議長 殿

会派名（無会派議員）名 塩原未知子



調査研究報告書

次のとおり政務活動事業を実施しましたので報告します。

事業名	日本農業遺産紅花の紅流通と芭蕉の足跡の調査
期日	令和3年11月19日（金）～20日（土）
主な利用交通機関	新幹線 地下鉄 タクシー
実施場所	(1) 渋谷区 伊勢半（紅ミュージアム） (2) 台東区 上野公園 東京国立博物館 (3) 江東区 芭蕉記念館・清澄庭園・中山船番所資料館
調査研究内容	(1) 花にこだわったまちづくり「農のブランディング」 「観光と農」尾花沢の歴史文化から基幹産業を再構築 かつて農産加工研究で本市が手がけた地場産の「紅の抽出」 研究と紅花大尽鈴木清風の江戸における紅の商い等の調査  (2) 150年歴史文化の継承とコロナ禍での見せ方  (3) 日本で2番目に古い芭蕉記念館40周年事業を調査 (江東区の芭蕉ゆかりの場所を町歩きする周遊体験) 芭蕉、清風歴史資料館と本町の町歩きを考える
参加者	塩原 未知子

※添付書類：所感等を任意様式にまとめ添付する

(所感)

鈴木清風没後 300 年、今回の調査では様々な「紅の縁」があった。発端は令和 3 年 (2021 年) 新春「尾花沢産紅花をつかった紅の抽出の研究成果の記録が市役所内にあるはず調べて欲しい」上の畑焼陶芸センター所長、伊藤瓢堂氏からの相談だった。この度の調査はこの「上の畑焼の古い紅皿」資料探しから始まった。

そして県では「最上紅花」世界農業遺産申請中との知らせあり、紅皿の縁から「江戸の紅商」「芭蕉」「清風」「最上紅花」、地名に花のつく市「尾花沢」。まだまだ紅花にこだわった調査を続ける必要を強く感じた。



#### 【紅花の紅抽出ワークショップ体験参加 (伊勢半・紅ミュージアム)】

日本で唯一、江戸時代から現在まで紅の製造を継承している伊勢半 (社)。調べていくと門外不出の紅抽出の方法を紅ミュージアム館内で展示し、実際に体験もできるという。その様子はネット動画 (Youtube) で見る事ができたが、コロナ禍の中、なかなか出かけられなかった。山形県内に伝わる紅染めとは異っており、江戸時代から継承された紅屋の紅の抽出、玉虫色の濃い紅色を凝縮する過程を感じる事ができ大変有意義な視察であった。



江戸時代からの日本を象徴する色「紅」の様々な魅力。ハレの赤。良質な紅だけがなぜ「紅色から緑黒の玉虫色に変わるのか？」未だ科学的に証明されていないと館内案内人は言う。そして、館内のワークショップで小学生でも簡単にできる

紅の抽出作業の工程を体験。15分程度だが改めて紅花乱花染の化学を学び「花で染める奥深さ」「紅花の魅力」「染めの化学」探究心に火がついた。今後も引き続き調査研究を続けていきたい。

### 【上野公園 東京国立博物館】公園アメニティ計画

上野公園駅から博物館までの道中、不忍の蓮池と丁寧に冬ごもりした古桜の並木に関心した。主役である樹木1本1本を大切に、風景を邪魔しない、主役に対して休憩場所の脇役だが、椅子や照明など公園には欠かせないアメニティが洗練されており、心地よいデザインで訪れる旅人を癒してくれる。規模こそ違え徳良湖の湖畔もこうありたい。



徳良湖畔の花畑造成地はできれば芝生に、風景を邪魔せず季節の花がもてなす。冬のスノーランドのアクティビティゾーンの事を思えば、メリハリのある造成で、アメニティは雪の重みにも耐える設計か、毎年簡単に移動と格納ができるデザインにしたい。もちろん修復も市内に発注可能なものが良い。東京国立博物館は国の宝を守り保管する役割。徳良湖は尾花沢の豊かな自然を守り保管する事も大切な要素。湖畔それぞれのゾーンを際立て、四季おりおりに輝く風景を邪魔しない、持続可能な公園アメニティデザイン計画が大切になってくるだろう。上野の公園に様々な思いで集う人々を見て、徳良湖湖畔全体のランドデザインをしっかりと見極める必要があると強く感じた。



【芭蕉資料館40周年記念まち歩き新ルート発表会参加（江東区）】



江戸時代、米の300倍の価値を生んだ特産品「最上紅花」の商いと交流が、どのように継承されているのか。探る上で芭蕉と清風の交流の原点でもある深川の江東区芭蕉資料館を調査した。

今年ちょうど40周年を記念して新たな町歩きの新ルートを発表するという事を知り芭蕉ゆかりのまちあるきに参加した。来訪は今回で4度目だが、新たなルートの町歩きを実際に案内人の説明を聞きながら、参加できた事は



大変幸運だった。現在コロナ禍の中、町歩きは健康維持の観点からも着目を集めており、大変人気の企画でキャンセル待ちでの参加であった。



集合駅から資料館までゆっくり歩いて約1時間半。様々な芭蕉ゆかりの場所を丁寧に町の中に保存している様子に感銘した。歴史と文化を伝えたい思いが説明盤やランドマークを通し、古の物語が時代の片鱗に揉まれながら今に至る史跡群のもの語りは、案内人の丁寧な



補足説明で、さらに魅力を深めた。

終着場所、芭蕉資料館の建屋をぐるりと取り巻く庭の説明は「いつの季節に訪れても一句よみたくなる草花がもてなしてくれています」との一言。



開館から40年間、毎日手入れされた植物群が生き生きと訪れた人に語りかけ、もてなしの風情に大変感動した。自然豊かな尾花沢でも、一輪の花、一葉が旅人をもてなす大きな力となるはず、さっそく尾花沢でも見習いたいものだ。



## 【まとめ】

俳聖芭蕉が「富めるものなれどいやしからず」と「おくのほそ道」で賞賛した尾花沢の豪商鈴木清風という偉人の功績は、没後300年後の今も、地元実業家、俳人として輝きを放つ。



菩提寺である念通寺に残る当市の無形文化財「念通寺雅楽」や「尾花沢祭囃子」から当時の反映が偲ばれる。今回の紅ミュージアム資料



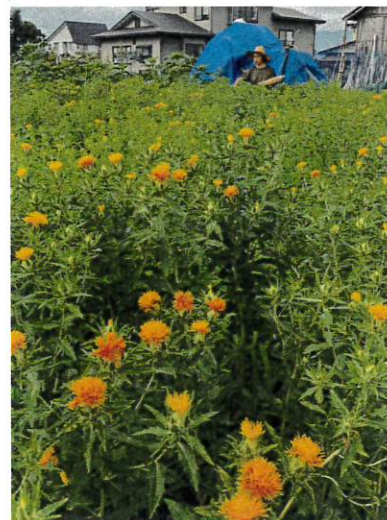
館での紅花商いの調査で良くわかった事は、当時、米や紅の交易の帰り道に、空になった戻り船には、数々の品と文化の交流があった事だ。帰りを待つ、妻や子に雛人形を土産にした事がやまがたの雛街道につながる。農村にまるで異質なほどの雅な京の楽や踊り、前句づけの伝統が残る尾花沢の謎も容易に理解できた。今回、芭蕉の足跡を辿り、江東区内の「清澄庭園」と「中川船番所資料館」にも町歩きを深め、江戸時代の「紅の商い」「京・江戸」の華やかで活気ある交流の軌跡が見えてきた。

北限の代官所、宿場町で栄えた尾花沢の在りし日の繁栄が、残された芭蕉と清風の交流の足跡からも感じられる。江戸時代の尾花沢に莫大な富をもたらした、まだまだ謎も多い鈴木清風の偉業。念通寺・尾花沢雅楽・尾花沢祭囃子・尾花沢祭、、、、紅花大尽と呼ばれた豪商「鈴木清風」という人物像にますます興味が湧いてきた。



「眉はきを俤にして紅の花」の一句は、尾花沢の清風に礼として芭蕉が贈った一句ではなかったのか。300年を経てなお、紅がとりもつ交流が素敵に「粋」に感じる。私も、感謝の心を一句詠めるようになりたいと思わずにはいられなかった。

尾花沢では紅花栽培は盛んではなかったとの話だが、市内をあちこち調べていくと昭和の時代まで、量は多くなかったらしいが、徳良湖付近でも栽培されており、紅花出荷組合も存在していた。そして山形の紅花は化粧品メーカー（資生堂）も買取っていたらしい。昨年秋には「最上紅花」で山形県は世界農業遺産を申請し、にわか紅花栽培も活気を取り戻す。庭畑で亡父が芭蕉、清風歴史資料館の館長時代に始めた北限の最上紅花栽培も来年は30年になる。紅花染めも我流だが昨年より再開。山形県花「紅花」の魅力に磨きをかけるためにも、もっと



紅の商いが盛んだった江戸時代の尾花沢の事を探り、改めて尾花沢の歴史と文化を、未来に語り継ぐためにも「尾花沢の伝説＝北限の紅花物語」を紡いでいきたい。

令和4年1月10日

尾花沢市議会議長 殿

会派名(無会派議員)名 塩原未知子



調 査 研 究 報 告 書

次のとおり政務活動事業を実施しましたので報告します。

事業名	県立図書館と博物館の調査
期日	令和3年 12月8日(水)・12月12日(木)
主な利用交通機関	(1)自家用車(12/8) (2)JR(12/12)
実施場所	(1)山形市(12/8) 山形県立図書館 〒990-0041 山形県山形市緑町1-2-36  (2)山形市(12/12) 山形県立博物館 〒990-0826 山形県山形市霞城町1番8号 「紅と藍」第3部プライム企画展
調査研究内容	(1) コロナ禍における図書館の本(検索)貸出図書等、利用の現状調査 図書館連携事業、人気の理由から現状と課題調査した。  山形県立図書館が春にリニューアルした。 県立図書館と悠美館との連携を踏まえ コロナ禍における悠美館のさらなる活用について調査した。  (2) 紅花と紅花の商いに関する県内の古い資料を辿り 「紅と藍」第3段企画展で「紅花の商い」に関する調査を行い 山形県立博物館と芭蕉・清風歴史資料館の連携について考察した。
参加者	塩原 未知子

※添付書類:所感等を任意様式にまとめ添付する

(所感)



### 【山形県立図書館と悠美館の連携】

山形県立図書館は悠美館とも連携しているという。令和3年4月に全面リニューアルし、コロナ禍にあっても人気の理由を探るために調査した。

エントランスホールは、ホテルのロビーか美術館のような明るさ。クリスマスツリーが季節感を演出。特設コーナーでは、飛行機に関する本が特別展示されていた。窓辺から外につながる中庭は丁寧に手入れされており、雪景色がきっと美しい事だろう。対面受付はもちろん丁寧な接客で満点。借りる本を置くだけの非接触の対応も可能で一度登録すれば、ネットからの貸し出し依頼も可能になっていた。近くの図書館に返却も可能で、探したいキーワードやジャンルをチェックすればおすすめの本のチョイスもしてもらえる。図書館全体が自分のための資料保管庫のような感じだった。

圧倒するほどの本の中に、お洒落なカフェも館内にはあり、中庭で気分転換、セミナールームに、ホールもあり1日中ゆったりと様々な用途で過ごせる場所となっている。遠方からリモート検索で必要な本をリクエストでき、悠美館で受け取る事も返却も可能。素晴らしい連携だ。地元偉人の関係蔵書展や、テーマをもうけた作品展示も見応えあった。



▶県立図書館は利用者の年齢層が乳幼児から学生、社会人、高齢者と広く、常連・リピーターが多い。快適かつ無料で調査、研究、趣味・娯楽、暇つぶし、、、多彩なニーズに対応→長時間滞在可能で自分の居場所がある。地域の図書館の役割を、知と情報の拠点と位置付け、「貸出型」から「滞在型」まちづくり・地域活性化の拠点施設へリニューアル。

密にならない明るく広い空間は、以前の県立図書館のイメージを一新してみた行ってみたくと思わせる場所になっていた。



◀リモートワーク可能なセミナールームは壁全体がスクリーン

▶読み聞かせコーナー  
幼児キッズルーム  
親子で1日ゆっくり

◀食の提案型カフェ  
(奥)軽食と喫茶  
(手前)テレワークスペース



悠美館はこれからどのようなニーズに対してリニューアルしていくべきなのか。調査も必要で、本を貸し出しする施設としてだけでなく、「知る事、学ぶ事、楽しむ事、集う事、癒す事、、、、」ハイビジョンホールや、美術展示だけではなく地域のニーズにあった蔵書を増やし、例えば戸田幸四郎氏の絵本と絵本の杜の連携で尾花沢特有の個性を出したリニューアルをすべきかもしれない。

#### 【山形県立博物館 プライム企画展(紅と藍)】

小学生以来の来館であったが、紅花の商いが盛んな頃の古い資料や、現場で活躍した道具や帳簿など貴重な品々を拝見する事が出来た事は大変有意義であった。その他縄文時代からの県内様々な資料の展示は、昔と変わらず何か懐かしさを感じた。

中でも注目した点は、山形県の最上川舟運が栄えた頃の商いの様子に「最上紅花」があった事。展示の中で注目したのは大石田の地名の他、尾花沢では玉野の地名があり、農産物出荷は「米」がやはり目立っていた事。宿場町尾花沢の位置よりは、農業の商いが中心であり、近代になり工業製品や銀山温泉などの観光資源が目立つようだったが、山形県を特徴づけるものとしては「さくらんぼ」や「紅花」「雛街道」など、農村地帯の中で色として「紅色」「あか」が極めて目立っていた事だ。

このプライム企画展(紅と藍)を見て、昨年手にした真壁仁の「紅と藍」の内容と合わせて「山形県尾花沢市」のブランディングを再考してみた。真壁氏は尾花沢市でも何年か居住しており滞在中住民と様々に交流していたらしいが、広くは知られていない。農と文学と教育と関係者との交流は、今も語り継がれている。間違いなく県花「紅花」は山形県の産業と商業の礎を築いたものと感じた。山形県の色はやっぱり、紅色かもしれない。藍は、私も1昨年より栽培してみたが、昭和の初期には尾花沢でも栽培されていたらしい。

ふと考えた、尾花沢市のイメージカラーは何色がふさわしいだろうか？  
スイカ色？雪白色？稲穂の黄金色？紅花色？

久しぶりの博物館、古きものから感じた思いから、新たな発見や考察があり訪れてよかったと思った。芭蕉、清風歴史資料館も様々な人に新たな活路を拓く場所であって欲しい。また、空き公共施設を利用して様々な地域の宝を展示し、地域をつなぐのも良いかもしれない。